

第一話

富勘長屋

005

第二話

三八野愛郷録

187

第三話

拐かし

305

第四話

桜ほうさら

427

桜
ほ
う
さ
ら

装幀——川上成夫

装画・挿画——三木謙次

題字——塚本祐子

本文デザイン——CGS

第一話

富とみ
勘かん
長
屋

今日は珍しいものを持ってきましたよ——

戸口から呼びかけられて、古橋笙之介は目が覚めたようになった。振り返ると、戸口に村田屋の治兵衛が立っている。手ずから風呂敷包みを抱え、小僧も連れずに一人で来たようだ。

笙之介は不思議でならない。立て付けのよくないこの出入口の障子戸を、どうして治兵衛はこ音もなく開け閉めすることができるのだろう。おかげでこちらはいつも不意打ちを食って、緩んでいるところばかりを見られてしまう。

「笙さん、また居眠りしてたんでしよう。何度も声をかけたのに」

治兵衛は狭い土間で履き物を脱ぎ、勝手知ったる気安さであがりこんできた。四畳半一間の笙之介の住まいの半ばを占めている文机の上をさっと目で掃いて、下絵用の粗紙にまだ何も描かれていないのを確かめると、含み笑いをする。

笙之介はあわてて手で目をこすり、硯や筆洗いを脇にどけた。治兵衛が持参の風呂敷包みを、大事そうにそこに載せる。

「寝ていたんじゃないですよ」

つい、言い訳がましくなる。

「桜を見ていたんです」

戸口の反対側、物干し場の先に、一本の桜の木があるのだ。細い掘割に面した土手の斜面に根を

張って、水面に大きく幹を傾けるようにして枝を広げている。

ほう——と、治兵衛は桜の方に目をやって眩しそうな顔をした。

「よく見えますな。しかしこれは」

首を捻っているので、笙之介は言った。

「板塀が失くなったんですよ。見通しがよくなったでしょう」

十日ばかり前までは、この桜の木と土手のあいだに、これまたかなり傾いではいたが、一応は体裁の整った板塀があった。これがないと、掘割をゆく猪牙や荷足舟からこちら側がまる見えになってしまうし、風が吹き込んでたまらないし、風に大潮が重なれば水しぶきまで飛んでくる。だから有り難い板塀だったのである。

しかしこれを、この長屋の子供たちがよってたかって倒して壊して叩き割り、焚きつけにしまった。そうしないと凍え死ぬような寒の戻りが五日も続いたからである。五日のあいだに、板塀はきれいに消えて失くなってしまったのだが、最初に手をつけたのが笙之介のところだった。

子供らの大将格の太一は、

——富勘に言いつけたらどうなるかわかってンな。

と、薪割りを手に笙之介に凄んだ。この子の歳はまだ十二で、笙之介はこれでも二十二である。しかも浪人とはいえ二本差しである。脅す方も脅す方なら脅される方も脅される方だが、

——私のところから壊し始めるなら、分け前ぐらいは欲しいんだが。

言ってみると、太一はちゃんと焚きつけを持ってきてくれた。これで言いつけようもなくなったわけである。

「眺めはいいが、笙さん、これから困りませんか」

「冬までには勘右衛門さんが何とかしてくるでしょう」

勘右衛門は、ここ、深川は北永堀町にある富勘長屋の差配人である。地主の福富屋は材木問屋で、屋敷は冬木町にある。このあたり一帯に広く地所を持っており、そこにある棟割り長屋の名前は、すべて頭に「富」を戴くのがならいだ。富吉長屋、富善長屋、富長長屋などめでたい字面だが、それらすべてを仕切る役割を持つ差配人の名がくつついているのは、富勘長屋だけであった。勘右衛門本人も、〈富勘〉が通り名になっている。

かといって、ここに勘右衛門の思い入れが篤いわけではない。むしろ福富屋の店子筋のなかではいちばん貧しくて、店賃を取り立てるのに手のかかる住人ばかりが寄っているとこぼしている。実際、貧乏長屋なのだ。そうでなければ勝手に板塀を叩き壊したりもしない。

ついでに言うなら、板塀が焚きつけに化けてしまったことが露見して、勘右衛門が頭から湯気をたてて太一を探し回っているあいだじゅう、当の首謀者は笙之介のところに潜んでいた。たまたま蒲団と夜着のあいだにはさまって、笙之介がその上に下絵を何枚も広げておいて、

——乾かしているところですから、手を触れないでください。
と、かばい通してやったのである。

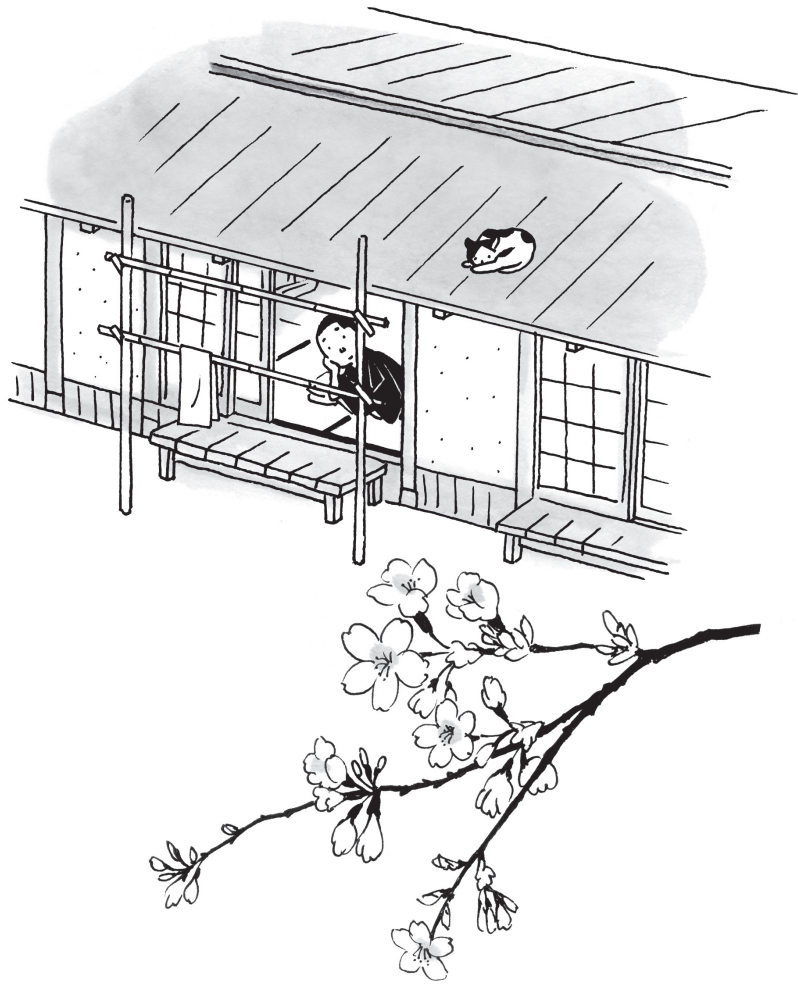
まんまと逃げおせた太一は、

——ハゲ勘も、笙さんには甘いんだよ。

やせてもかかれてもさむらいだからと、生意気なことを言っていた。言う方も言う方だが言われる方も言われる方である。

その話をする時、治兵衛は愉快そうにひと笑いをした。

「太一はまだ逃げ隠れしてるんですか」



「いえ、とづくに御赦免ごしやめんです。そこらを飛び歩いていますよ」

「富勘さんに見つかつたらことでしょうな」

「もう湯気も品切れですよ。今さら怒つたつてしようがないし、あれで勘右衛門さんは面倒見のいい人だから、板塀も直してくれるはずですよ」

今度はそう簡単に焚きつけにされてたまるかと、福富屋にかけあつて、うんと頑丈がんじょうなのを立ててくれるかもしれない。

「なかなかいい枝振りだが」

掘割まで開けた外に目をやり、治兵衛はちよつと首をすくめて、

「まだ一分咲きですな。それに今日の陽気じゃあ、開けっ放しは冷える」

吹き込んでくる川風は、確かに寒い。笙之介はこちらの障子戸を引いて、桜を隠した。

「墨も摺すりらんで見惚みどろれていたとは、あの桜に、なんぞいい絵が見えましたか」

治兵衛の問いかけに、笙之介は火鉢ひばちの炭をつつき、温ぬるくなつた鉄瓶てつびんを五徳ごとくに据すえ直すあいだ、しばらく答えないうちにおいた。

「——国許くにこの桜を思い出していました」

治兵衛の口元のやわらかい笑みが、ふととまった。

「藩校の庭に、あれとよく似た枝振りの桜の木があつたんです。池の畔ほとりで、やつぱり水の上に身を乗り出すような恰好かっこうをしていました」

満開の候には、畔に咲く桜と水面に映る桜とが二重写しになつて美しく、〈鏡桜〉と呼ばれていたのだつた。

「このごろ、お便りなどは」

「年明けにあつたきりです。変わりはないということでしょう」

良い方にも、悪い方にもと、心のなかで言い足した。治兵衛にはそれで通じた。無言のまま、軽くうなずいている。

村田屋は、深川佐賀町にある書物問屋である。治兵衛の兄の興兵衛こうべが三代目の主人で、大川のこちら（東）側では、書物問屋としてはもつとも大きいお店だろう。商家から旗本、大名の下屋敷を顧客こきゃくに、手広く商あきないをしてる。

一方で村田屋は貸本屋も営んでいた。こちらは治兵衛が取り仕切っている。兄弟で商あきないを分担しているのだ。笙之介は興兵衛には一度しか会つたことがないが、物腰こそ柔らかいものの、商人というよりは軍学者のような眼差しまなざしの鋭い人で、女子供も相手にする貸本業には不向きのように思われた。その点、地口じぐちも言いえば噂話うわさばなしも無駄話むだわなしも大好きで、笑うときには真つ先に目元から笑う治兵衛は、この商あきないにはうつつけだつた。

歳は笙之介よりだいぶ上である。確かめたことはないが、ふたまわりは違ちがうだろう。だが目立つ長身で細身に、くつきりとした目鼻立ち——とりわけ、太一たちに「炭と炭団たんだんを並べたみたいだあ」と言われる太い眉まゆと大きな目が、不釣り合あいでいながら妙な愛嬌あいきょうを添そえており、おまけに愉快えんかなことがあるとどこでも子供のように手放てなしに笑うので、不思議と若々しい人物だ。

笙之介が治兵衛と知り合あひ、写本作りの仕事を請け負うようになって、そろそろ半年が経たつ。親しい間柄ではあるが、話し好きの治兵衛は、己おのれのことに限かつては進んで語らない。だから笙之介は、彼がかつて、娶めとつたばかりの愛妻を思おもいがけぬ凶事きょうじで失ない、以来ずつと、戒律かいりつ僧そうのように独ひとり身を通としていることを、つい先頃知しつた。勘右衛門が教えてくれたのである。

——あれで寂さびしい身の上なんだよ。

どうやら腰を据えてあの人と付き合っているらしいから、耳打ちしておくよと言われた。このことを知っている者は、今の富勘長屋にはいないし、村田屋のまわりじゃ誰もけっして口に出さないから。

——笙さんだって、いくらうらなり瓢箪ひょうたんだらうが金がなかるうが風采ふうさいがあがらなかるうが、まだ若いんだし男なんだし、女ツ気がほしいこともあろうさ。色っぽいことをしたいときもあるうさ。でもそんなときは、治兵衛さんを誘さそったり、手引きを頼たのんじやいけないよ。酷こだからね。

ここでもいいように言われた笙之介せいしけいだった。

「さて」

笙之介せいしけいが縁ふちの欠けた湯飲ゆのみみで白湯さゆを出す頃合ころあいになって、治兵衛は持ち前の大きな目で、じいっとこちらをすくい見た。

「笙さん、これが何か気になるでしょう」

「珍しいものだとおっしゃいましたね」

文机ぶんぎの上の風呂敷包みである。村田屋の屋号が入った藍染あゐぞめの風呂敷で、きっちり四角く包んである。

嬉うれしそうにもみ手をしてから、治兵衛は固い結び目を解ほどきにかかった。

「驚うれいちゃいけませんよ」

いかにも驚いてほしそうに、くつくつ笑う。風呂敷のなかからは、何冊かの書物が現れた。いや、書物ばかりではない。半紙をぐるりと巻いた薄べったい包みももうひとつある。それは何やら、薄い板を重ねたもののように見えた。

「まずはこちらだ」

治兵衛は文机の上に、書物の方を並べてみせた。四冊ある。どれも揃そろいの装丁そうていで、野菜の図柄ずがらを型で打ち出した紺色こんいろの表紙あきざに、浅黄色あさぎの短冊型たんだくの題簽だせえんが付けてある。

その題簽だせえんの文字を見て、治兵衛の期待どおりに笙之介せいしけいは驚いた。

「これは——『料理通』じやありませんか」

揃そろったんですねと治兵衛を仰あおぐと、貸本屋の主人あるじは目を輝かせていた。

「ええ。抜けていた二編と、去年出たばかりの四編が一揃そろに手に入りました」

同じ意匠いしょうの書物が四冊、しかし、これの作られた年代は少しずつ違うのだ。初編はつぱんは文政五年（一八二二）、二編は文政八年、三編が文政十二年、そしていちばん新しい四編は天保六年（一八三五）に出ている。十三年がかりである。

『料理通』は、江戸随一の料理屋「八百善」が、店で客に供する料理について記した書物だ。献立こんだてを四季に分けて配列し、それぞれに料理法についての解説が付けてある。それだけでも充分に贅沢ぜいたくだが、加えて綺羅星きらぼしのような文人画人たちの文章や図や彩色版面さいしきが添えられているところがまた豪奢こうしゃだった。

文化文政のころには料理本が大流行し、さまざまな意匠と内容のものがたくさん作られ、広く読まれた。しかしそれらのなかでも『料理通』は図抜けて名高く、何より名店の八百善が出したところには他にない意義がある。

というようなことは、無論、治兵衛の下で働くようになって初めて知った。笙之介が生まれ育った上総国搦根藩なづねはんは江戸から二日の旅程にあるが、開幕以来の旧藩ふるとはいえ一万五千石の小藩である。加えて現藩主の千葉家は謹厳実直きんげんじつちよく、質素儉約しつそけんやく、武を重んじる家風だから、おのずと家中もそれに倣なまい、華美な料理本などにも用がない。仮にあったとしても、笙之介の生家古橋家、禄高

八十石の手の届くところにはなかった。

そのつましい家禄さえ召し上げになり、父を亡くし、嫡子である兄は国許で親戚のもとに身を寄せ蟄居の日々を送っている今ならば、なおさらである。

——それなのに。

こうしてきらびやかな『料理通』を眼前にしている己は一体、何者なのだろう。ここで何をしていけるだろう。障子は閉めたはずなのに、不意に胸元を冷たい風がよぎるようだ。

「売り出したときには、これに書袋が付いていたらしいのですよ」

二編を手に、見返しのところを示しながら治兵衛が言う。笙之介はまばたきをして目を上げた。治兵衛はうつとりとした眼差しになっている。

「八百善の暖簾を模した意匠でしてね。洒落た趣向です。挟み込んであっただけなので、残念ながら転売のあいだに抜け落ちてしまったんでしよう」

「探せば出てくるかもしれませんよ。先の引き札（チラシ）のように」

「そうそう。まだ楽しみが残っているというものです」

笙之介はおっかなびっくり四編を手にしてみた。他の編も良好な状態だが、やはり新しいだけに、いちばん色目も鮮やかだ。

「これには卓袱料理や普茶料理が書かれています」

「しつぽく……」

「長崎の郷土料理ですよ。普茶料理は禅宗の一派の精進料理です」

「はあ、という顔をするしかないので、笙之介はそうした。

「字だけなら何とでもなりますが……」

治兵衛は笑う。「ご安心なさい。私も、やっと揃えたこいつをいきなり笙さんに預けようというほど無欲にはなれません。自分、手元に置いて大事に楽しみます」

笙之介は大いに胸を撫で下ろした。

「それでも、目の保養にと思ひましてね」

揃ったのを見せびらかしたかったしと、治兵衛は言う。

「保養にはなりますが、心の臓には悪いようですよ」

さつきから手が震えて仕方がない。

「私には、やっぱりまだまだ、もっと気楽な古書の方がいいようですよ」

村田屋へ出向き、今の仕事を預かってきたのが五日前のことである。約束の日にはだいぶ先だ。それだからこそ、のんびり桜を、それも一分咲きのまだうすら寒いような眺めに見惚れていられたというわけなのだ。

「でも、仕事の話もないわけじゃない」

治兵衛は言って、『料理通』を拝むようにしてきれいに包み直すと、もうひとつの包み、半紙でざっとくるんだ方を取り出した。

「実は、珍しいものというのは、こっちの方なんです」

ひと目では何だかわからない代物だった。半紙ぐらいの大きさの薄い板きれに、刷り物が貼つてある。それはわかる。だが、刷つてある絵柄がわからない。笙之介は目を近づけてみた。

瓦屋根がある。廊下があって、これは欄間か。畳が敷いてある、これは座敷だろう。いくつもある。床の間には掛け軸と花器。

「こいつは〈起こし絵〉というものです」と、治兵衛は言った。「切り抜いて組み立てると、小さ

な『八百善』が出来上がるんですよ」

あつと思つた。なるほど。建物だけではなく、家具や調度も描き込んであるのだ。

「まあ、玩具おもちゃのようなものですがね。よくできていますよ？」

料理本が大流行したころは、八百善が名亭の評判を確立したころでもある。庶民ばかりか、そこそこの身代しんだいを持つ商人あたりにも遠い憧れあこがれの的だった八百善は、こんな形でもはやされることもあつたのだ。

「よくまあ、きれいに残しておいてくれたものです。私もまさか、これがそっくり手に入るとは思わなかった」

ひとつ組み立ててみませんか、という。

「私が？」

「造作ぞうさくないでしょう。笙さんは絵や字が上手うまいだけじゃない、手先が器用きゆうなから」

「貴重なものなんでしょう？」

「それだって、いっぺんは組み立ててみないことには、勝手がわからないじゃありませんか」
雲行きが怪あやしくなってきた。

「勝手——とは」

「私はこれをお手本に、新しい〈起こし絵〉を作つて売り込もうと思うんですよ。手始めは、こちらの料理屋にね」

それすなわち、笙之介にその作り方を考案しろということだ。

「世の中、だいぶ息苦しくなつてきてますがね。去年の御鑄造ごちゆうぞうでも、町場まちばの暮らし向きが目立つて良くなつたわけじゃない。むしろ悪くなつてくるくらいだけでも、こういうときこそ商いには工夫

が要るつてもんでしよう」

笙之介はあらためてしげしげと件の〈起こし絵〉を検分した。

「しかしこれは、名高い八百善のものだからこそ価値があつたんじゃありませんか」

生涯、夢のなかでさえ庶民には縁のない場所だからこそ。

「この界限かいはんの貧乏所帯ひんぱんじょうたいには、八幡様の二軒茶屋にんげんぢやも、八百善と同じくらい遠い場所ですよ」

それは笙之介も然りしかである。

「料理本だつて同じだ。うちから料理本を借りるのは、料理人ばかりじゃない。見るだけでもお腹なかいっぱいになるつていうお客も大勢いるんですよ」

確かにそうだろう。また村田屋は、そういうお客たちのために、安価な写本を作ることを進んで始めた貸本屋なのだ。おかげで笙之介も飯めしが食えている。

「それに、料理屋がお客にお土産みやげとして持たせるといふのもいい手だと思つてます。あるいは、仕出しに付けるとか」

そつちの方がまだ使い道がありそうだ。子供は確かにこういう玩具が好きそうだが、たとえば太一など、豪華な料理を出す店に興味を持つとは思えない。持つても、買うだけの金がない。笙之介の目に入るところでは、子供たちの玩具は、自分で調達するか、自分でこしらえるものである。

「わかりました。やつてみましょう。でも、上手く組み立てられるかどうか……」

「し損じたからつて、笙さんに払う労賃で弁償べんしょうしろなんてしみたれたことは言いませんから、ご安心なさい」

治兵衛は笑顔で言うが、笙之介にとっては死活問題である。

「実は、『平清』にはもう話を持つていつてあるんですよ。面白いじゃないかと乗り気でした」

平清は深川では名の知れた料理屋だ。治兵衛は商いばかりでなく、客としても出入りしたことがあるのだろう。村田屋は手堅く繁盛している。

「飯粒を練って糊にすれば、湯気をあてるだけで剝がして貼り直しもききますからね。まあ、そんな顔をしたくないで、気楽にやってみてくださいよ」

風呂敷包みを腕に、立ち上がりしな、治兵衛は言い足した。「そもそも起こし絵の方はもらい物でしてね。あたしは一銭も出してない。だから損はありません」

そういうことは最初に教えてほしい。

治兵衛を送り出し、立て付けの悪い障子戸をがたびし閉め直して文机の前に座ると、ため息が出た。

面倒だと思うわけではない。実は笹之介は、こういう細かい手作業が性に合っている。それどころか好きなのである。

——でもなあ。

商いというのは不思議だ。ここで暮らすようになって半年余り経ち、治兵衛とはあれこれとやりとりを重ねてきたけれども、今ひとつ笹之介にはピンとこない、腑に落ちないことが多い。ああすれば売れる。こうすれば評判になる。こうすればお客がつく。これをやるとお客が遠のく。国許では考えもしないことばかりだった。

いや、武士の考えることではなかったのだ。

——本当に、遠くへ来てしまった。

今さらのように思うのだった。